

## 理論ガイド 2

# ポジティブ行動支援を 実践する上での 8つの心得



### 【心得1】

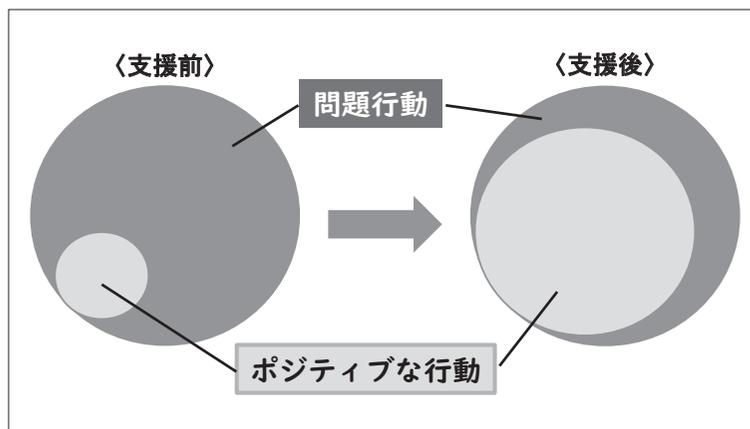
#### ポジティブな行動を増やすことで、相対的に問題行動を減らす

ポジティブ行動支援を学校において教師が実践していく上で、大切な考え方があります。その1つが、「問題行動を“減らす”のではなく、ポジティブな行動を“増やす”」ということです。

子どもの問題行動に着目してしまうと、「その問題行動をどうやって止めさせるか」「どうやって起きないようにするか」というネガティブな思考に陥りやすいものです。それにより、体罰や注意叱責などの不適切な指導の原因になってしまうこともあります。ポジティブ行動支援は、問題行動だけに着目して対応するのではなく、「問題行動に代わるポジティブな行動が、どのような環境調整によって生まれやすくなるのか」「持続しやすくなるのか」と考えます。

日々の指導の中では、問題行動に対して指導を行うことはあると思いますが、それだけに終始せず、ポジティブな行動を増やす支援を考えていくことが求められます。ポジティブな行動と問題行動とは同時に行うことが

資料1-3 支援前後の問題行動とポジティブな行動の変化



できません。よって、ポジティブな行動を増やしていくことは、相対的に問題行動を減少させることになるのです（資料1-3）。

ところで、ポジティブな行動とは何でしょうか。誰にとってポジティブなのかということ、一度立ち止まって考えてみたいものです。本書8ページで示した定義では「本人のQOL向上に直結する行動」とあります。つまり、教師・学校にとってポジティブな行動なのではなく、“子ども自身の人生や生活にとって”プラスになる行動を指すのです。

よって、ポジティブな行動とは“学校の管理・統制、教師にとって都合がいいだけの行動ではない”ということを中心としておく必要があります。ポジティブ行動支援では、「その環境において、どのような行動がポジティブなのか」「どういった行動を期待するのか」「何をもってポジティブな行動なのか」などを子どもとともに丁寧に議論し、共有を図ることで、よりよい実践をつくっていくことができます。

## 【心得2】

### 行動の原因を環境に求める（その人のせいにはしない）

次に、「行動の原因を“個人”ではなく“環境”に求める」という考え方があります。職員室で「どうしてこの子はこんなことばかりしてしまうんだろう」「この学級の子どもたちはなぜ…」などと、頭を抱えてしまうことはありませんか？ しかし、原因をその子の性格や特性といった内側に求めてしまうと、解決の糸口は見えなくなってしまいます。例えば「なぜ勉強ができないの？」→「自分は能力がないから」→「なぜ能力がないの？」→「だって勉強ができないから」というように、「勉強ができない」という状況を、「能力がない」という言葉で言い換えているだけの循環論に陥ってしまいます。このように、結果的に「その子が悪い」と個人を責めるだけで終わってしまう状況を、行動分析学では“個人攻撃の罠”と呼びます。

資料1-4 原因帰属理論 (Weiner, 1979)

	変化が難しいこと	変化可能なこと
対象者の内側	生まれつきの能力 発達的な課題、器用さ 身体的・精神的な障害 頭が悪いから	経験不足 努力、体調 やる気 勉強しなかったから
対象者の外側	生まれた環境 親の育て方 法律や制度 難しい問題だから	課題の量・内容 部屋の気温・静かさ 座席の位置・高さ 運が悪かったから

このような循環論や個人攻撃の罠に陥らないための方法を考える上で参考になるのが、ワイナーの原因帰属理論です（資料1-4）。この理論を踏まえれば、「個人のせいにするのはやめて、外側の変化可能なこと（環境）に目を向けて支援策を考え

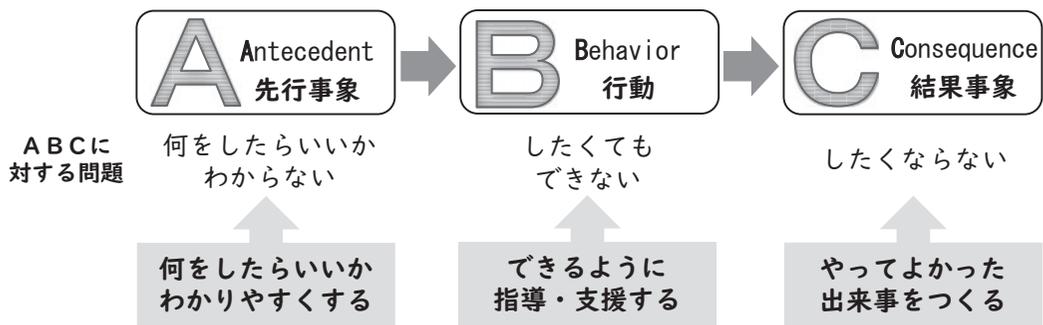
ていこう」という、建設的な合言葉を持つことができるでしょう。これは子どもに対してだけでなく、大人（教師や親など）に対しても同様です。「どうしてこの人は…」と思ってしまうこともあると思いますが、そのような際もこの【心得2】を意識したいものです。

そして、この「行動の原因を“個人”ではなく“環境”に求める」という考え方があればこそ、障害の有無や特性にかかわらず、すべての子どもが大切にされる学校をつくっていくことができるのです。これは、ポジティブ行動支援が目指す、「ノーマライゼーション」や「インクルーシブな社会」の実現そのものなのです。

### 【心得3】 行動の機能を整える

ポジティブ行動支援は、ポジティブな行動が生まれやすくなるように、定着するように支援をしていくわけですが、その際は先述のABCのフレームに基づき、それぞれにおけるポジティブな行動が生じにくい問題に対して支援を考え、「行動の機能」を整えていきます（資料1-5）。

資料1-5 ポジティブ行動支援における3つのアプローチ



ここでは「あいさつをする」という行動に対する支援を例に考えてみましょう。

#### 先行事象（A）を整える

まず先行事象（A）に対して「何をしたらいいかわからない」という問題が考えられます。そこで、「あいさつはいつ・どういった場面で行うのか」「どのようにあいさつをするのか」「なぜあいさつが大切なのか」などについて、わかりやすく話します。

例えば、あいさつの大切さを伝えて、あいさつに取り組むためのポスターを掲示したり（資料1-6）、集会で呼びかけたりします。また、あいさつをする場所を示すこと（資料1-7）も、先行事象に対する支援と言えるでしょう。

ここでは、「あいさつをすることは学校として必要だから」と求めるのではなく、「あい